

I. はじめに

私は2018年12月20日から30日まで笹川平和財団主催のイラン短期研修に参加した。本プログラムの前半はテヘランでイラン国際関係学院(School of International Relations: SIR)での講義と学生とのディスカッション、その後、国会、イラン外務省、在イラン日本国大使館などの市内視察、後半は地方都市訪問で、エスファハーンではジャーメ・モスクやバザール、カシャーンではフィーン庭園などの史跡を訪れた。このようなプログラムによって、様々な角度からイランの現在の姿を見ることが出来て有意義な経験となった。ここでは、今回の研修を通してイランについて興味深く感じたポイントを(1)SIRのイラン人学生の政治意識、(2)イランにおける中国の影響力、(3)イランにおける女性の活躍の3つのトピックに絞ってまとめることとする。

II. 興味深く感じたポイント

(1) SIRのイラン人学生の政治意識

SIRのイラン人学生は反米意識が強いが、同時にイランが平和主義であることを強く主張し、国際問題に対する認識が事柄によっては私達と異なる点もあった。そもそもSIRとはイラン外務省付属の大学院であり、多くの学生は卒業後にイラン外務省で働くことになっている。そのため、イラン人在校生は国家のエリートであり、既に修士号を複数取得している学生も多かった。第一に、そのようなSIRの学生達は、強い反米意識を持っていた。彼らは、その要因はイラン・イラク戦争にあると述べた。私たちは彼らと一緒に、主にイラン・イラク戦争について展示しているテヘラン平和博物館と防衛博物館(Holy Defense Museum)を訪問した。その際、彼らはイラン・イラク戦争でイラクが使用した化学兵器の残酷さを語り、それにかかわらず米国がイラクの化学兵器使用を黙認してイラクを支援したこと、その結果イランは国際社会から見放された状態であったことを強調し、米国を批判した。その上、私たちがイランを訪れた時期が、米国のトランプ大統領によるイラン核合意(JCPOA)の離脱や制裁の再開の直後であったので、イラン人学生の米国に対する不信感や不満は一層高まっていた。イランの原子力政策の講義においてSeyed Hossein Sadat Meidani教授も述べていたが、JCPOAは条約ではないが、国際連合の安全保障理事会で採択されて法的拘束力があるにも関わらず、これを離脱した米国は不合理であり、国際社会のルールに違反していると主張していた。第二に、彼らはイランがいかにも平和主義国家であるかを常に強調していた。それは、彼らが信仰するイスラム教がそもそも平和を求める宗教であるためだと述べて、イスラム教がテロの温床になっているとの誤解にいら立ちを持っているのが感じられた。第三に、例えばアサド政権に対する見方など事柄によっては、彼らとは国際問題に対する認識の相違があった。彼らはアサド政権よりであり、アサド政権による化学兵器の使用を否定し、欧米諸国とは異なる認識であった。このような認識が形

成される要因の一つには、学生たちが手に入れられる海外の論文やニュースが限られているという点もあるだろう。SIR の学生は、米国の制裁により外国からの情報が制御されていると話していたが、一方でこれはイラン政府によるものとの説もある。

(2)イランにおける中国の影響力

現在、世界の色々な地域で存在感を高めている中国だが、イランにおいても中国の影響力の高まりがみられた。事実、テヘラン市内では、アリババやファーウェイなどの中国企業の広告が目立ち、多くの中国製の車が市内を走っていた。中国側からみると、中国の一带一路構想において、アジアとヨーロッパ地域を繋ぐイランは重要な地域である。同時にイランにとっても、中国は最大の輸出国であり、重要なパートナーである。そのため、イランは中国の一带一路構想を支持し、インフラ分野での中国との協力を強化している。SIR の Nabi Shirazi 教授は、イランの経済政策に関する講義の中で中国企業の競争力の高まりについて指摘していた。特に最近では米国による制裁の再開により、その影響を恐れてイランから撤退を進める国も多く、その穴埋めを中国が担おうとしていると述べていた。また、Shirazi 教授及び日本の外務省職員の方は、イランの南東に位置するチャーバハール港の開発の重要性に言及していた。この港はその立地から物流の面においても戦略的に重要であり、米国による制裁の適用外ということもあるので、イランは特にこの港の開発に力を入れている。インドは既にこれに投資しており、開発に大きく関わっている。中国は現時点ではチャーバハール港の開発には参加していないが、この港の隣に位置するパキスタンのグワダル港の開発を進めており、これらは競合関係にあると言われている。Shirazi 教授はこのチャーバハール港はイランの経済発展の上でも重要性が高く、日本にも積極的に開発に参加してほしいと日本への強い期待を示していた。このように、中国の影響力の高まりはイランでもみられており、日本としてはこれらの動きを注視する必要がある。

(3)イランにおける女性の活躍

イスラム圏のイランにおける女性の社会進出は宗教上の理由で遅れていると想像していたが、今回の訪問で少し印象が変わった。国会見学では Ms. Farideh Oladghobad と Ms. Nahid Tajeddin の 2 名の女性議員から話を伺う機会があった。実際にイランには女性省があり、ここでは各省庁から出た女性活用に関する案を取りまとめているとの説明を受けた。女性国会議員の一人は、女性は将来母親になるのでより平和に対する思いが強く、外交において女性が果たす役割が大きいと述べて、政治の議論の中に女性を入れる重要性に言及した。SIR でも女子学生の割合は少ないが、少しずつ増えているようだ。彼らの話から、女性の社会進出に対するイランの前向きな姿勢を知って、その取り組みに将来性を感じた。因みに、2017 年の各国議会の女性進出に関するレポートによると、日本は 193 ヶ国の中で 158 位であり、これは OECD 内では最下位である。¹日本も先進国として、引き続きこの問題に取り組まなければならない。

III. おわりに

この報告書では、本研修を通して興味深く感じたイラン人学生の政治意識、イランにおける中国の影響力、イランにおける女性の活躍の 3 点についてまとめた。この点以外にも、今回の滞在を通して、イラン人のホスピタリティーやイランの歴史的建造物や工芸品に見られるイラ

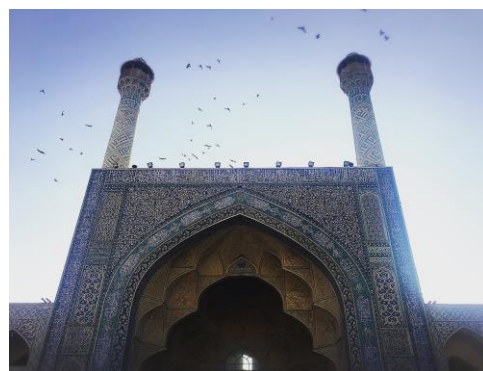
¹ “Women in parliament 2017”, *Inter-Parliamentary Union (IPU)*, March 2018.

ンの豊かで洗煉された文化などを感じることができ、イランに対する親近感を抱いた。日本人にはイランは中東の遠い国というイメージがあるが、彼らは自分たちをアジア人として認識しており、日本人のことを同じアジア人としてみている。米国の制裁の下、日本とイランで協力できる分野は限られているが、SIR の学生や教授との講義を通して、彼らが日本に対して良い印象を持っており、また日本との関係を強化したいという強い意思を持っていると感じた。今年には日本とイランの外交関係樹立 90 周年を迎える年でもある。日本が欧米先進国と違い中東において歴史的に負の遺産を持たない点からも、日本はイランと他国をつなぐ架け橋として重要な役割を果たせると考える。この研修を通して得た経験を今後に生かしていきたい。

最後に、このような機会を下さった笹川平和財団の皆様、および SIR の皆様に感謝を申し上げます。



エスファハーンのジャーメ・モスク



SIR の学生と日本人学生(テヘラン市内にて)